

一楽思想と高畠魂の共鳴



＝ 農的社会デザイン研究所代表・蔦谷栄一 ＝



蔦谷 栄一（つたや えいいち）

東北大学経済学部卒業。1971年農林中央金庫に入り、熊本支店長、農業部副部長を経て、96年農林中金総合研究所基礎研究部長。常務取締役、特別理事などを経て、2013年11月より現職。

高畠町は山形県の南部、米沢市の北隣に位置し、山並みに囲まれ、奥羽山脈に源を発する屋代川などの扇状地に開けた町である。自然とともに実りも豊かで「まほろばの里」といわれてきた。平たん地ではコメが、山間地にかけてはブドウやリンゴ、ラ・フランスなどの果樹とともに畜産が盛んで、ワインをはじめとする農産加工品も多い。そして何よりも有機農業が盛んな地として知られる。

この高畠町に先日、「一楽思想を語る会」で講演するため、十数年ぶりに足を運んだ。「一楽」は、1971年に立ち上げられた日本有機農業研究会の中心人物の一楽照雄である。大変印象に残る会であったが、町で有機農業への取り組みを開始してから50周年となる昨年に発行された記念誌「土を耕し 心耕す」を購入し、併せて同町と深く関係してきた早稲田環境塾が発行した「高畠学」を帰京後に読んでみた。

そこで改めて一楽思想に共鳴し、有機農業の展開を可能にした理由・源が、高畠町で生業（なりわい）を営む農民たちの農業や自然に対する愛着と謙虚さ、そして歴史の積み重ねにあることを強く感じた。言い換えれば、これらを背景に持った農民の内発性・主体性の故に、一楽思想をこの町で実践し、花開かせることが可能になったように思う。

「高畠学」に、町のリーダーであった星寛治は「新しい田園文化社会を求めて〔有機農業の展開を軸に〕」なる論考を寄せているが、この中で高畠町の歩みについて、1970年代を手探りの草創期、80年代を地域に根を張る運動へ、90年代を都市と農村の多彩な交流、2000年代を小さな共生社会への一歩、と総括している。この間、一楽は足しげく通い、有機農業運動の灯を高畠にともしたと記し、また一楽の揮毫（きごう）による「子どもに自然を 老人に仕事を」を、有機農業の神髄を表現したものであるとしている。

そして自らの有機農業への取り組みを振り返り、「自然に真向かい、農政の転換に翻弄（ほんろう）されつつも、土の力に信頼を寄せ、いのちを育むモノづくりをライフワークとする中で、私は農のよろこびを実感できるようになりました。はた目には全く愚直に見えるその営みの核心の所に、何よりも作るよろこびがあります。まるでいとし子を育てる親の面持ちで、また時として農芸作家のようなまなざしで土や作物に向き合い、入念な手入れをする。その作物が求める環境を整えるために、労働とわざを施すのです。いのちを育むモノづくりは、生命の神秘や尊厳への終わりのない旅のようでもあります。だから注いだ汗の結晶のような産物は、商品ではなく作品だと自負しております」と珠玉のような文を記している。これに続き、収穫のよろこび、みのりを他に分かち合うよろこび、とりわけ消費者との提携でいのちのつながるよろこび、も書き加えている。



講演後に行われた懇親会の様子

「土を耕し 心耕す」によれば、1960年に町の青年団活動がスタートし、61年に農業基本法の学習会を行い、64年に農業青壮年研修所が開設され、70年には公害調査に乗り出してもいる。

青年団の活動、そしてこれを生み出してきた風土と歴史の積み重ねという前史があってこそ、一楽との出会いを必然にし、一楽思想と対話しながらの有機農業への取り組みを可能にしたのではないかと。意見交換する中で、ある農民の「農業は文化だ」との毅然（きぜん）とした発言が耳に残る。